

イチゴ炭疽病抵抗性育種と 種子繁殖型品種「よつぼし」の育成

森 利樹 氏（58歳）

三重県農業研究所
生産技術研究室長



1 業績の概要

背景

イチゴの炭疽病は最も深刻な病害の一つで、育苗中に蔓延し苗が全滅するほどの甚大な被害をもたらす。苗の段階で枯死を免れても収穫前になって次々と枯死してしまい大きな減収要因となる。それにもかかわらず、抵抗性品種は昭和35年発表の「宝交早生」以来途絶えており、新たな品種の育成が強く求められていた。また、イチゴは本来栄養繁殖であるが、種子繁殖型の品種ができれば、増殖効率の向上、病害虫伝染環遮断と育苗労力削減において大きなメリットがあり、イチゴ生産の革命につながる事が期待されていた。

研究内容・成果

イチゴ炭疽病抵抗性極早生品種「かおり野」と我が国で初めて実用化された種子繁殖型品種「よつぼし」を育成した。

炭疽病抵抗性の選抜技術を確立し、9世代に亘って改良を進めることによって、長年失われていた炭疽病抵抗性を復活させたうえ、我が国のイチゴ促成栽培に適する早生性を極限まで高め、連続出蕾性、大果性、多収性、食味に優れた品種「かおり野」を育成した。この品種の利用では、生産者に許諾を求める独自の許諾制度を設計し、三重県内に限定することなく炭疽病に困る全国の生産者に普及を進めた。

また、イチゴは本来栄養繁殖であるが、国内4機関による共同育種を主導し、我が国2番目、実用では初となる種子繁殖型品種「よつぼし」を育成した。種子繁殖型品種は、従来品種に比べ増殖効率が飛躍的に向上し、種子伝染する病害虫は限られるため病害虫伝染リスクが大幅に低下するうえ、栽培面においても育苗労力の大幅削減になる。この品種の利用では、従来にない新しいタイプの品種であることから研究会を組織し、栽培技術と種苗供給体制を確立して全国への普及を進めた。

炭疽病抵抗性極早生品種「かおり野」

- 上品な香りと爽やかな甘み
- 極早生：普通栽培で11月中旬収穫開始
- 果実が大きく連続出蕾で収量多い
- 炭疽病抵抗性



死活問題
深刻な炭疽病被害
に勝つ

種子繁殖型品種「よつぼし」

登場！ニュータイプのイチゴ品種

病害虫伝染回避

増殖効率抜群

美味しいヨ！



種子



セル苗



普及状況

「かおり野」は、生産者1,100件以上と7団体に許諾され、秋田県を除く全都道府県で栽培されている。「よつぼし」は、平成29年度実績で、本格デビュー2年目でありながら、全国の先進的生産者の間で話題を呼び、種苗35万粒（栽培面積換算5ha）が販売された。

2 評価のポイント

「かおり野」は、貴重な炭疽病抵抗性品種であるうえ、近年の温暖化傾向の中でも安定して早期に花芽分化する極早生性も注目されている。また、優れた遺伝資源として新品種の交配母本としても多く利用されている。「よつぼし」は、我が国で初めて実用化された種子繁殖型品種であり、従来品種を凌駕する高い市場性を持つ。イチゴの生産を変革し、今後の品種開発に大きな影響を及ぼしたことを高く評価した。